

# 月にも訊け。

Interview with LUMEN\*

取材=村山友宏(本誌編集長) 写真=播本明彦  
Text by Tomohiro Murayama Photograph by Akihiko Harimoto

## 知ってるようで知らないルールや審判のハナシ。

ロンドン五輪でブラウンリー弟が受けたペナルティーから、レースウエアのフロントジッパー禁止まで。  
日本で唯一、五輪でも活躍する国際審判(技術代表)に訊く、ルールと審判のこと

This month's LUMEN 鈴木貴里代さん

——鈴木さんを紹介するとしたら、オリンピックでも活躍している日本で唯一の国際審判員——という言い方になつてしまふんですが、ひとくちに「国際審判員」と言っても、実際には、いろいろグレードがあるんですよね?

鈴木 ITU(国際トライアスロン連合)だと下からレベル1・2・3とあつて、一番上の3になると審判というよりは「技術代表」(TD=テクニカル・デリゲート)ということになります。この資格は要するに、大会運営にかかわるすべてのことをマネジメント、コントロールする人のこと。大会の現場に行つて判断することだけでなく、その前に、コースや会場のレイアウトを考えるのももちろん、受付などの選手サービス、メディアサービスまで、オペレーション全般についてアドバイスできる人を養成するための資格制度です。

——現状、レベル3のTDは国内では鈴木さんだけ?

鈴木 そうですね。国際ルールが改訂されて「レベル3」が設定されたのが2年前くらい。私はその前からレベル2の資格をもつていて、オリンピックなどの国際大会で仕事もしていたので、すぐにレベル3の資格試験を受けられました。昨年の12月にブダペストで試験を受けました。

——試験もそうですが、レースの現場でのコミュニケーションも含め当然、すべて英語ですよ。語学についてはもともと素養があつたんですか?

鈴木(笑) 若い人たちにも自信をもつてもらいたくて、よく言うんですけど、私は学生時代に英語で良い成績をとつたことはなかったですね。高校のときにグラマーで1をとつたこともありません(苦笑)。

もともとは選手(エイジグループバー)として、アイアンマンなどに出ているんですけど、遠征で海外に行つたときにもつという人々と話せたら楽しいだらうなあと、英会話を勉強したんです。で、そんなことをしている頃、95年に(地元・愛知の)蒲郡でワールドカップが始まりました。その前に私はオレンジトライアスロン(※蒲郡の一般の部)で優勝していたので、自分で大会に出るのはもう卒業してボランティアとしてお手伝いしようということになつたんです。せっかく英会話も勉強したし。それで、大会オフイシャル・ホテルの受付に座つてお手伝いをするうちに、当時のレス・マクドナルド会長とかITUのメンバーとも仲良くなつていって。

### ルールだからと身構えず シンブルに考えればいいんです

——現在に至ると、シドニー、アテネ、北京に続いて先のロンドンにも日本代表として派遣されたわけですが、オリンピックでは、何人くらいテクニカルのスタッフがいるんですか?

鈴木 ロンドンでインターナショナル・テクニカル・オフィシャルとして集まつたのは20人くらい。地元選出のスタッフを合わせて30人ほどです。

——ロンドンでの鈴木さんの担当は?

鈴木 トランジションとフィニッシュテーブルホルダーでした。

——例のブラウンリー弟のペナルティもトランジションエリアでしたよね。

鈴木 直接の担当箇所ではなかったんですけど、乗車ラインの手前でバイクに乗つてしまったというのでした。——直後は情報が錯そうして、「脱いだウエットスーツがちゃんと所定の

ところに収まっていなかった」とか、そんな話も聞いてました。

鈴木 そこは私の担当でしたが、みんなちゃんと収まっていたよ。

——オリンピックで優勝争いをしていいる選手がペナルティボックスに入るといふシーンは、ある意味新鮮でしたが、51・5kmでペナルティボックスが採用されたのは、いつからでしたっけ?

鈴木 もう3年くらいにはなるので、ちょうど前の北京五輪が終わつた後くらいです。今は大分浸透しましたけど、当初は、それまでの感じでウエットやヘルメットをバツと投げ捨てるようにしてしまふ選手も多くて、ひどいのは3回分ペナルティをとられた選手がいましたね。つまり15秒×3回。まず、最初のトランジションでスイムキ

ャップとかゴーグルがボックスに入っていないかった。乗降車ラインをミスした。そしてバイクフィニッシュ後にヘルメットを適当に脱ぎ捨ててしまった……そうやって2回、3回と、とられる選手も中にはいましたね。

——それにしても、技術代表って、何となくこれまでの延長で、審判の代表というイメージしかなかったんですけど、運営に関してもマーシャルの観点から見て、ルールに沿つて、安全にトライアスロンができるかどうかチェックしていくという仕事に進化しているというのは興味深いですね。

鈴木 昔と違って、今はITUの中でもマーシャルという呼び方はあまりないですよ。テクニカル・オフィシャル」という呼び方をする。ときどき勘違いされる方もいるんで

すずき・きりよ ●トライアスロンが正式採用されたシドニー・オリンピック以降、すべてのオリンピックで審判(テクニカル・オフィシャル)を務めている国際審判員。国際トライアスロン連合(ITU)公認TD(技術代表)。日本トライアスロン連合では理事、国民体育大会委員長などを務める。自身もかつてはアイアンマンなどを転戦したトライアスリート。



すけど、審判になったからエライわけではなく、まず私たちの仕事で一番大事なのは、選手が安全・公正に競技をするために何が必要なのか——を考えること。それが他の、たとえば球技の審判などと違うところ。現場に入っ

て何かをジャッジメントするという仕事はそんなに多くないですね。だから、レース中は何にもすることがなかったというのがベスト。ルール違反もコースミスも転倒もなかったというのがベストだし、本来はそれができて当たり前。そうできるようにレース前、「ここに何が出ているから危ない」とか「このカーブは危険」とか、「ここにコーンを置いたらレースがスムーズに進むんじゃないか」といったことを考える仕事なわけです。そういった部分が「テクニカル」の意味合い

なんだと思います。——エイジがメインのトライアスロン大会なんかで見ていると、中には必要以上に高圧的に、頭ごなしにルールのことを言うマーシャルの方がいて、正直違和感を感じることもあります。鈴木 私たちがエイジのレースなどしなければいけないことは何かというと、基本的には「安全に、完走させてあげること」のサポートをすることだと思っんです。もちろん競技ですから、その中でも最低限守らないと競技が成立しないルールがある。ほかの人の安全を脅かしてしまうとか。でも、本来はルールありきではない。その順番を勘違いして、いきなり頭ごなしにルールのことだけを言って、威圧的にふるまうというのは、違うんじゃないのかなと思うんですが……。

もちろん厳しくしなければいけない場面はあるんです。けれど、やっぱり大事なのは選手との信頼関係だと思うので、変に一方的に威圧的になつたりしてはいけません。たとえば、パーティーのような催しにしても、タキシードを着たり正装で出席しなければいけない会もあれば、カジュアル・スマートでいい、うちうちのパーティーみたいなものもあつたり、いろいろTPOがあります。トライアスロンの大会も同じ。エリートのレースとエイジのレースでは、全く出ている選手も競技レベルも目的も違うし、大会によっても競技性の高いものから、ホントに初心者向けの(とにかくトライアスロンを楽しく始めてもらうための)大会まで、いろいろな大会がある。どんな大会でも安全、公正にという目的は一緒なんです。TPOが違う。それに合わせたルール運用や審判ができないといけないんじゃないかと。

——当然、参加する選手の側もルールについては、その意味や目的を理解して守っていかないといけないんですが、ホビーで参加する一般選手には、なかなか理解が進まない面もありますね。鈴木 J・T・U(日本トライアスロン連合)のウェブにも競技ルールは掲載しているのですが、実際には、なかなかそこまで見にくい場合も多いでしょうね。そういう意味では、ぜひ専門誌にも力を貸していただければと(笑)——確かに。でも、ルールとかマナーに関する記事って難しくても、もともと読まなくていいような意識の高い方は目を止めてくださるんですけど、読んでもほしいような方に限って、そういう記事は読み飛ばす傾向にある。この記事なんかまさにそうですが(苦笑)。

鈴木 ルールって言っても、考え方はすごくシンプルなんですけどね。キープレフトで抜くときには素早く——とか、バイクの競技ルールもほとんど道交法と同じ考え方。追い越すときに大きく膨らんだら、対向車とぶつかるリスクが増える危険、とか。——ビギナーの方に、たまに聞かれるのは、「トランジションの際に、なんでヘルメットをしっかりとかがぶって、ストラップまで止めてないといけないんですか?」なんでそんな細かいことに目くじら立てて怒るんですか?」と(笑)。でも、「もしトランジションエリアで、ヘルメット落したりなんかしたら、後続の人が危ないですね。その状況を想像したら、たくさん選手がいる中で、自分も急に止まってヘルメット拾って……危なくないですか?」と言うと、「あ、そっか」となる。

鈴木 ホントに、シンプルに考えれば当たり前のことはわりと。ルールって考えると、身構えちゃうんですけど。——国内の一般選手の間ではユニフォームのフロントジッパー禁止(※2)が話題になっていますが、エリートのレースについては、少し前に同じような話がありましたよね?鈴木 3年前だと思っます。もっと以前にフロントジッパーは禁止になっていたんですが、日本のメーカーのレースウェアはフロントジッパーでも、当て布があつたりして肌の露出は変わらない、ということの使用が認められていたんですが、海外ブランドの製品にはそうしたものは無い。となると、今度は前を開け閉めできるということが競技上アドバンテージになってしま

## 月にも訊け。

により厳格な適用が決まったんです。つまり、形や大きさに関わらずフロントジッパーが付いていること自体が認められなくなりました。

——「そもそも何で前開きウエアがないの？」と聞かれることも多いんですが、安全上の問題じゃないだけに、ちょっと説明の仕方にも困るところもある。結局、サッカーなんかと同じで、スポーツ全体の流れとして競技中にウエアを脱いだり半裸になるというのは禁止されていますよね……と、そのあたりを引き合いに出すのですが。

**鈴木** そうですね。それに、自分たちが（トライアスリート・コミュニティの）中にいると割と気が付かないことなんですけど、国内でも、一般の大会の開催地で、全くトライアスロンを知らないという地域住民の方から見ると、レースが終わった後に、選手が（上半身）裸でうろろしているというところに違和感がある。実際、そういうクレームも出るんです。

自分たちも、もし近所を半裸でうろろしている人たちがいたら、当然違和感を感じると思うんですけど、ト



Triathlon.org / Janos Schmidt / ITU



(写真上) ロンドン五輪では揃ってメダルを獲得したブラウンリー兄弟。3位に入った弟ジョナサン(左)はバイクスタート時に乗車ラインの手前でバイクに乗り、15秒間のタイムペナルティーを受けた／(左下) WTS横浜大会でもTDを務めた鈴木さん(右)。パラ部門の会場設定などもディレクションを担当した／(右下) ロンドンでの競技説明会の模様

ライアスロンの大会会場という自分にとっては特別な空間では、そういう一般常識的な感覚が抜けてしまう……。それって結構危険じゃないですか？

私自身もレースが終わった後で、選手が暑いのは分かるし、上半身裸になっていることも特に気にならなかったんですが、そういうクレームを受けたとき、「そりゃそうだよね」と思った。

——アイアンマン・ハワイで、レース前々日の朝に開催されているアンダー・パンツ・ランニング(P22参照)なんかも、アプローチは全く違いますが(笑) 考え方は同じですよ。ハワイ島のような、一見、ゆるそうな土地柄でも、いきなり海外から来たトライアスリートたちが、パンツ一丁みたいな格好で町中をうろつくことに衝撃が走ったという(笑)。トライアスリートの自虐コント仕立て啓蒙活動というか。

それに、まあ、全員が全員、トップアスリートのような美しい体型をしているわけでもないですしね。

**鈴木** エリート選手にしても、昔はみんな胸をはだけて当たり前でしたけど、今にして思うと、いかにトップアスリートといえども見るからにだらしなかつたし、逆に今はキレイですよ。教育上、ヘルメットやらウエットスーツをバインと投げつける、なんていうのも確かに良くはないでしょうし。——仲間内で、好き勝手にワイワイ楽しんでる分にはまだ良かったけれど、こうして五輪の正式種目として定着して、日本でもゴールデンタイムにTV放送されるようなスポーツに成長してくると、外からの見られ方というのも当然、考えないといけない。

**鈴木** ただ、エイジの一般的な大会、特に普及のためのレースとかでは、参

加者が専用ウエアを持っていないので、水着の上にTシャツとか、バイクジャージで参加するという方も多いですね。そのあたりは別に対応を考えないといけないでしょうね。

## 感謝されることもあれば罵声を浴びることもある

——後進に向けて、マーシャルやテクニカル・オフィシャルの仕事をお勧めとしたら、その魅力をどう伝えます？

**鈴木** そこがなかなか難しいところなんです。私が今年一番シヨックだったというか、反省したのは、ある若い世代の人に、「貴里代さんを見ていると忙しそうだし大変そうで、そんな仕事、自分にはできません」と言われてしまったこと。確かに大変な部分もありますけど、自分の中では楽しんでやってみようという気持ちです。でも傍から見るというは見えないように……これはちょっと私も見せ方とか考えなきゃ。

——言うまでもなく楽しいだけの仕事じゃないだけに、そのあたりは伝えづらいでしょうね。

**鈴木** レースが終わった後、選手の誰かに「ありがとございました!」「楽しかったです」なんて言っていただけなのが、唯一の愉しみです。逆に、罵声を浴びることもあるんですが、さすがにそれは辛いですね。

でも、思い返してみれば、私自身、選手の頃、大会会場に行く、「あの人がいると安心してレースができるな」と思わせてくれる存在の人たちがいたから私もこっちの世界に來たし、自分もそうなりたいたいと思っただけです。

だから、今シーズン、一番シヨックだったのはさっきの一言だったかも知れませんね。